

# 経済・金融 フラッシュ

## 貿易統計 13年12月

～貿易赤字の拡大続く、10-12月期の外需寄与度は前期比▲0.5%程度のマイナスへ

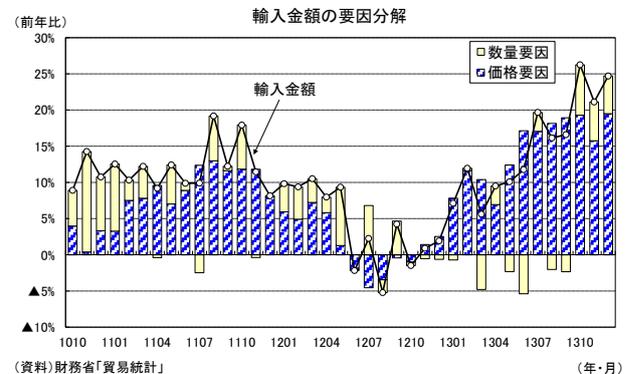
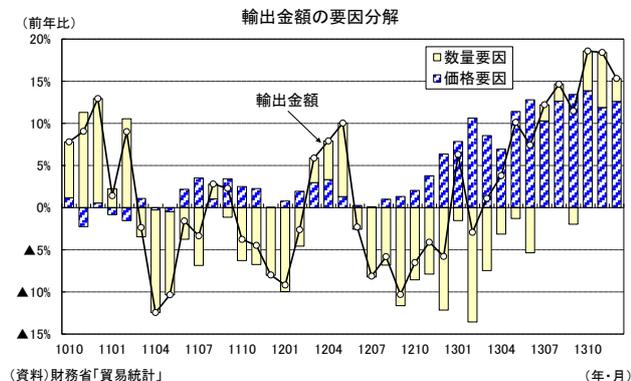
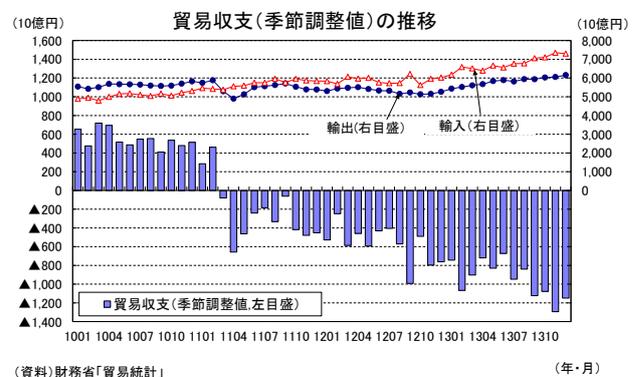
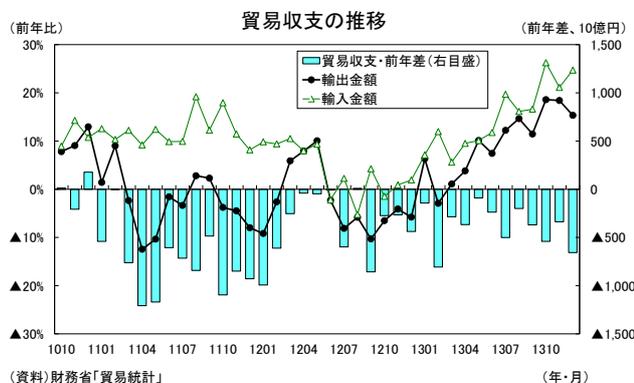
経済研究部 経済調査室長 斎藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

### 1. 貿易赤字は拡大傾向が続く

財務省が1月27日に公表した貿易統計によると、13年12月の貿易収支は▲13,021億円と18ヵ月連続の赤字となり、赤字幅は市場予想（QUICK集計：▲12,399億円、当社予想は▲11,379億円）を上回った。円安の影響から輸出入ともに高い伸びとなったが、輸入が前年比24.7%と11月の同21.1%から伸びを高める一方、輸出の伸びが鈍化（11月：前年比18.4%→12月：同15.3%）したため、貿易赤字は前年からほぼ倍増となった。

輸出の内訳を数量、価格に分けてみると、輸出数量が前年比2.6%（11月：同6.2%）、輸出価格が前年比12.4%（11月：同11.5%）であった。輸入の内訳は、輸入数量が前年比4.7%（11月：同5.0%）、輸入価格が前年比19.1%（11月：同15.4%）であった。



季節調整済の貿易収支は▲11,486億円の赤字となり、11月の▲12,938億円からは赤字幅が縮小

した。輸出が前月比 1.7% (11月:同 0.5%) と 3ヵ月連続の増加となる一方、輸入が前月比▲0.6% (11月:同 3.5%) と 6ヵ月ぶりに減少した。貿易赤字は単月では若干縮小したが、四半期ベースでは 13年 4-6月期の▲8.9兆円 (季節調整済・年率換算値) から、7-9月期が▲11.6兆円、10-12月期が▲14.1兆円と拡大傾向が続いている。先行きについては、輸出は持ち直すものの、消費税率引き上げ前の駆け込み需要を主因として輸入は高めの伸びが続くことが見込まれるため、13年度末にかけて高水準の貿易赤字が続く可能性が高い。

貿易赤字の拡大を主因として経常収支 (季節調整値) は 13年 9月から 11月まで 3ヵ月連続の赤字となっている。12月の貿易赤字 (季節調整値) は前月よりも若干縮小したものの、依然として高水準となっており、現時点では 12月の経常収支 (季節調整値) も赤字になると予想している。足もとの赤字は消費税率引き上げ前の駆け込み需要により輸入が押し上げられていることも影響しているため、このまま経常赤字が定着するとは考えにくい。ただし、年度末にかけて貿易収支だけでなく、経常収支も赤字になりやすい状態が続くだろう。

## 2. 貿易収支は 3年で 18.1兆円の悪化

13年 12月分と同時に発表された 13年の貿易赤字は▲11.5兆円と 3年連続の赤字となり、赤字幅は前年から▲4.5兆円拡大した。円安の影響から輸出入ともに前年よりも増加したが、輸出の増加幅 (6.0兆円) を輸入の増加幅 (10.6兆円) が大きく上回った。

貿易収支の悪化要因を数量と価格に分けてみると、輸出は円安に伴う価格上昇が 7.1兆円の収支改善要因となったが、大幅な円安にもかかわらず数量が減少したことが▲1.0兆円の悪化要因となった。海外経済の回復ペースが緩やかにとどまったことに加え、海外生産シフトの進展などから輸出が構造的に伸びにくくなっていることも考えられる。

一方、輸入は円安による価格上昇が▲10.3兆円の悪化要因となったことに加え、国内需要の堅調を背景に数量ベースでも底堅い動きとなったことが▲0.3兆円の悪化要因となった。輸出に比べ輸入の価格要因の悪化幅が大きいのは、輸出入に占める外貨建ての割合が輸入のほうが高いため、円安による価格上昇の影響をより強く受けるためである。なお、13年の鉱物性燃料の輸入数量は前年比でほぼ横ばいとなったため、貿易収支にほとんど影響がなかった。

### 貿易収支悪化の要因分解

(単位: 兆円)

	2011年	2012年	2013年	3年間合計
貿易収支 (前年差)	▲9.2	▲4.4	▲4.5	▲18.1
輸出 (前年差)	▲1.9	▲1.8	6.0	2.4
数量要因	(▲2.6)	(▲3.2)	(▲1.0)	(▲6.8)
価格要因	(0.7)	(1.4)	(7.1)	(9.1)
輸入 (控除項目、前年差)	▲7.3	▲2.6	▲10.6	▲20.5
数量要因	(▲1.6)	(▲1.6)	(▲0.3)	(▲3.5)
うち 鉱物性燃料	<▲0.3>	<▲1.2>	<0.1>	<▲1.4>
価格要因	(▲5.7)	(▲1.0)	(▲10.3)	(▲16.9)
うち 鉱物性燃料	<▲4.1>	<▲1.1>	<▲3.5>	<▲8.6>

(注) 輸出 (入) 数量、輸出 (入) 価格の交差項は各要因に同額配分している

2013年の要因分解は一部見込値による

(資料) 財務省「貿易統計」

貿易収支は東日本大震災発生前の10年（6.6兆円）から13年（▲11.5兆円）にかけて▲18.1兆円悪化した。輸出の増加が2.4兆円にとどまる一方、輸入が20.5兆円の大幅増加となったためである。このうち、輸出は価格上昇分の9.1兆円を数量減少分の▲6.8兆円が打ち消す形となり、輸入は数量増（▲3.5兆円）、価格上昇（▲16.9兆円）がともに貿易収支を悪化させる方向に働いた。原発停止に伴う燃料費の増加が貿易赤字の大きな要因とされることが多いが、鉱物性燃料の輸入数量の伸びは11～13年の平均で2.2%（輸入数量全体は1.8%）、これによる貿易収支の悪化は▲1.5兆円で、全体（▲18.1兆円）の1割にも満たない。このことは原子力発電所が再稼動したとしても、貿易収支が大きく改善することは難しいことを意味している。

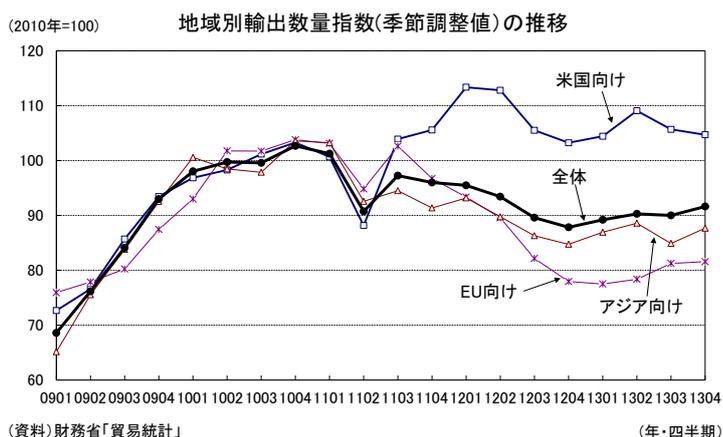
### 3. 輸出は持ち直すも引き続き輸入の伸びを下回る

12月の輸出数量指数を地域別に見ると、米国向けが前年比▲4.6%（11月：同2.9%）、EU向けが前年比5.4%（11月：同0.4%）、アジア向けが前年比2.2%（11月：同6.0%）となった。

10-12月期の輸出数量指数を季節調整値（当研究所による試算値）で見ると、米国向けが前期比▲0.9%（7-9月期：同▲3.1%）、EU向けが前期比0.4%（7-9月期：同3.7%）、アジア向けが前期比3.3%（7-9月期：同▲4.2%）、全体では前期比1.8%（7-9月期：同▲0.3%）となった。

アジア向けは日中関係悪化の影響が薄れるなか中国を中心に持ち直し、景気が底入れしつつあるEU向けも持ち直しているが、景気が比較的堅調な米国向けが低調な動きとなっている。

一方、10-12月期の輸入数量指数（季節調整値）は前期比2.8%となり、7-9月期の同1.2%から伸びを高めた。消費税率引上げ前の駆け込み需要もあって国内需要が堅調に推移していることが輸入の高い伸びにつながっている。



### 4. 10-12月期の外需寄与度は前期比▲0.5%程度のマイナスに

12月までの貿易統計と11月までの国際収支統計の結果を踏まえて、10-12月期の実質GDPベースの財貨・サービスの輸出入を試算すると、輸出が前期比1%弱の増加、輸入が前期比4%台程度の増加となることが見込まれる。この結果、10-12月期の外需寄与度は前期比▲0.5%（7-9月期：同▲0.5%）と2四半期連続のマイナスとなることが予想される。

当研究所では鉱工業生産、家計調査、建築着工統計等の結果を受けて、1/31のweeklyエコノミストレーターで10-12月期の実質GDP成長率の予測を公表する予定である。現時点では、外需は成長率の押し下げ要因となるものの、国内需要は個人消費、住宅投資、設備投資、公的固定資本形成がいずれも高めの伸びとなることから、実質GDP成長率は前期比年率2%台後半となり、7-9月期の同1.1%から成長ペースが加速すると予想している。

（お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。